

『蜜欲のオメガ -バタフライ・ノット-』

著：藤華るり

ill：逆月酒乱

保健室を目指して歩いたものの燦々と降り注ぐ太陽の光に屈し、使われていない倉庫の壁にもたれ掛かって座りこんだ。

テントからそこまで距離はないというのに身体は疲れていた。汗ばんだ肌は焼けそうな温度を持ち、身体が震える。強烈な喉の渇きにペットボトルの水を一口含んでみれば、舌は敏感で水の感触が生々しく伝わった。

これは熱中症なのだろうか——熱中症にしては異常すぎる身体の状態に嫌な想像が浮かぶ。

予定よりも早く、発情期が来たのかもしれない。今までにも何度か、予定時期からずれることがあった。

背後からクラスメイトの声がした。

「……時田」

聖の名を呼ぶ声に、別のものが含まれている。それは自らの状態を報せる艶めかしいものだ。

「な、に……？」

「追いかけてきてごめん！ で、でもその……今日のお前見てたら、我慢できなくて……」

高揚したその頬は、聖に反応していることを示している。予定よりも早く発情期に入ってしまったのだと確信した。

発情期に入ってしまうえば日常生活も困難になるほど身体が敏感になる。今はまだ抑えられているが、時間が経てば体育祭に参加するところではないだろう。散々溜めこんできた熱が、ようやく放たれようと暴れている。目の前にいるのは、何度もセックスをしたクラスメイトだ。

彼と、してしまえばいいのではないか。悪魔に唆され、聖はゆっくりと頷く。

「……うん、」

しよう、と言いかけた時だった。

ゆらり。太陽が沈んでしまったのかと思うほど大きな影が二つ。クラスメイトの背後から現れた。

「お前……」

影を見上げ、その正体を知り、降り注ぐ軽蔑の眼差しを受けてようやく。聖はこの状況に気づいた。

二人がいる。リュウとトラがいるのだ。

心臓を鷲掴みにされたように、固まって動けない。発情期に入ったばかりの身体はまだ正気を残していて、この状況が恐ろしいものだと認識している。

リュウは、怯え竦んでいるクラスメイトを睨みつけると、普段よりも低く、怒りを含んだ声で

言った。

「失せろ」

「ひっ……」

誰が見ても、リュウとトラが上位の存在だとわかる。年齢差だけではない、纏っている雰囲気
の格が違うのだ。彼らに敵わないと悟ったクラスメイトは走り去っていく。聖と、聖を忌々しく
睨みつける二人だけが残った。

「あんた、発情期に入ったよね？ 薬、飲んでなかったんだ」

「ご……ごめんなさ……」

一歩、リュウが歩み寄る。

まさか殴られるのか。両目を強く瞑って身を固くするも、リュウの手は聖ではなく、倉庫の扉
を掴んでいた。

鍵は、開いている。リュウが扉を開くと、しばらく誰も立ち入らなかったのだろう籠もった空
気が外へ溢れ、積もった埃が舞い上がった。それと同時に聖の身体もふわりと浮く。

「なっ、何を……」

「黙ってろ」

腰と膝裏に手を添えられ、リュウに抱えられていた。それは聖を気遣う優しいものではなく、
道具を運ぶための乱雑なもの。

庫内に入ると、使われていないマットの上で解放された。

「……抑制剤を使わなかったんだね」

マットに身を預けたままの聖が聞いたのは、失望を交ぜたトラの呟き。

聖を信じていたのだろう、それを裏切ってしまった。謝ろうとした聖だったが、それはできな
かった。遮るようにリュウが覆い被さったのだ。

今にも触れてしまいそうな、息遣いもはっきりとわかる距離。にやりと口元を緩ませながら、
リュウが言う。

「使わなかった理由は、コレだろ？」

するりと伸びた手が、聖の身体を撫でる。汗で張りついた体操服を、首からずるずると下ま
で。下着に隠れながらも身を硬くしようとしている聖自身にたどり着いたところで、指先が止ま
った。

「……っ！」

「犯されたかったんだろ——望み通りにしてやる」

甘い、花の香りがする。一度嗅いでしまえば痺れてしまうほどの。

一瞬。答えに悩んだ間を待つことなく、リュウに唇を塞がれた。

突然の口づけに慌てて唇を閉ざそうとするも遅く、隙間からぬるりとリュウの舌がねじこま
れる。恋人がする甘いものと程遠い荒々しさは、捕食という名が相応しい。きっちりと合わせた歯
列を舌先でなぞられ、くすぐったさに吐息が漏れた。

奪われていく。酸素を求めてしまうほど。苦しさにかが抜け、開いた隙間から入りこんだリュ
ウの舌がいよいよ聖を捉えた。狭い口中を逃げても追いかけては絡み合う。そのたびに唾液が口

端から伝い落ちる。溺れている、気がした。

「ね、オレもちゅーしたい」

トラの一言で、ようやくリュウから解放された。

だが完全な解放ではないのだと、トラの指先が語る。聖の顎を軽く持ち上げて覗くトラはにたりと怪しい笑みを浮かべていた。

「四つん這いになって。舌、出して」

学園の人間ではない彼らと、こんなことをしていいのか。かろうじて残った理性が警鐘を鳴らしている。それでも逃げられないのだ。冷えた眼差しが射抜くように聖を睨みつけている。抵抗はできなかった。

授業で使用されていたマットは柔く、手足をついて身体を支えるには心許なかったが、逆らえずに膝をつき、言われた通りの体勢で舌を出す。

情けない。何て屈辱的なポーズなのだろう。だらしなく舌を伸ばす聖は降伏する犬と同じ。降り注ぐ視線が、聖の姿を嗤っていた。

「似合ってるよ、聖ちゃん」

犬にご褒美をあげるように、トラの舌が聖の舌先をつついた。そのまま、余すところなく舌を絡ませて制圧していく。

唇は触れていないのに、互いに舌を伸ばして絡ませている。その行為は聖の熱を目覚めさせるのに十分すぎた。荒い息が混ざり合い、どちらのものかわからなくなるたびに、下腹部へ血液が集う。

「……あ、」

ずるり、と太股を通り過ぎていく布の感覚。汗を吸いこんで重たくなっていたズボンと下着を脱がされ、臀部が外気に晒された。不意の出来事に、吃驚の声が漏れてしまった。

この体勢では秘部が丸見えになってしまう。脚を閉じようとしたが、聖の抵抗を予期していたリュウの腕が割りこんでいて閉じることができない。

視線を感じる。トラに舌を弄ばれている状態ではリュウの姿を確認することができず、剥き出しの太股にかかる吐息しかわからない。羞恥心がこみあげて頬がより熱くなる。

リュウの指は後孔を通り過ぎ、脚の間で重力に逆らい主張する聖自身にたどり着いた。発情によって敏感になった男根は、キスだけでも興奮して身を硬くしていたのだ。それに直接触れられてしまえば、身体がびくりと跳ね上がる。

「あ、そこはっ……！」

「オメガの発情期ってのは恐ろしいな。犯されようとしているのに勃ってやがる」

聖の反応を楽しんでいるのか、リュウの声音に興奮の色が混じっていた。

リュウの大きな手が、ぷるぷると震える聖自身を容易く包み、誘うように根元から擦り上げる。薄皮に浮かぶ血管や流れる血も逃さず捕らえるように。だが先端までたどり着くと、指先は力を失い、離れていった。

何度も動いてはやめを繰り返す。その指先が優しすぎるものだから尚更、発情期の身体は刺激を求めてしまう。物足りなさに腰をくねらせながら聖が呟く。

「じ、焦らさな、いで」

「何だ？ どうしてほしいんだ」

「……気持ちよく、してほしいです……もっと扱いて……」

だがその懇願は鼻で笑われた。

「勘違いしないでね」

顎を持ち上げられ、トラと目が合う。

「オレたちはさ、あんたを求めてセックスしているんじゃないよ。あんたが気持ちいいとかよくないとか、そんなのどうでもいい」

学園の人間たちは聖を貴重品のように丁重に扱ってきた。自身の欲を満たす代わりに聖の欲も満たす、ギブアンドテイクの関係だった。

しかしリュウとトラは違う。彼らは自分が満たされればいいのだ。それを証明するように、隠すものもなく曝け出された後孔に違和感が走った。

「……く、あ、」

ほぐす優しさはない。まだきつい場所に指が二本ほどねじこまれ、痛みに聖の顔が歪む。

「い、たっ、痛い……」

「あんたはコッチ」

聖の鼻先に突きつけられたのは、大きく聳え立つトラの肉欲。大きさだけではなく、硬さも形も、どれを取っても聖を超えている。

まさか、これを啜えろというのか。だがトラは、躊躇う聖の髪を容赦なく掴み、唇に押し当てた。

「歯を立てたら殺す」

冗談ではないのだと、地を這うように低い声でトラが脅した。諦めて舌を這わせれば、血管を歪に浮き上がらせた欲の塊は、雄の味がした。

舐めるだけの行為を焦れったく感じたのか、聖の頭を無理矢理に動かして口の中に収めていく。掴まれた髪の痛みと喉まで広がる苦しさ、目の端に涙がじわりと浮かんだ。

その間に、後孔に差しこまれた指が蠢く。しばらく使われていなかったため固く閉ざされていた後孔は、異物を押し返そうとリュウの指を締めあげていた。

その奥に、あと少し先に、擦ってほしい場所があるというのに。その部分がかすめるのみで届かないのがもどかしい。

「時田。いいことを教えてやる。お前が相手にしてきた学園のやつらはベータ。どこにでもいる普通の存在。獣にすらなれない半端者だ」

リュウがどんな話をしようとも、髪を掴まれて口いっぱいにはトラの肉欲を啜えこんでいる聖は答えることができない。ふうふう、と荒い呼吸音が虚しく響いても、リュウもトラも行為をやめようとはしなかった。

これから先の行為に備え、淫口を広げるべく蠢く指先は、快樂よりも痛みを生む。

「俺たちはアルファだ。ベータとは違う、獣の衝動を秘めている」

ずぶ、と水中から起き上がるような音を立て、リュウの指が後孔から抜けていく。

何人もと肉体を繋ぎ合わせたからこそわかる、予感。次に襲いかかるものはとても大きく、身体が千切れてしまいそうなほど切ないもので——わかるからこそ悔しくなる。自分は道具として扱われているのに、勃ったままの自身は寂しげに刺激を求めてうち震えていた。これでは、ギブアンドテイクではない、一方的な性処理だ。

「これがアルファのセックスだ」

押し当てられたのは指とは比べものにならない質量を持ち、異常な熱を持つリュウの男性器。先端が当たるだけでも、その凶暴さが伝わってくる。まるでアルファが持つ性衝動を具現化したように。

この先に畏怖し、息を呑んだ瞬間——苦痛が埋めこまれた。

「う、あ、あああ———！」

労りなど微塵もない。後孔から全身へ駆けていく苦痛。聖は背を丸め、言葉にならない悲鳴をあげてそれに耐える。

熱い。内臓から焦げていくようだった。粘膜がみちみちと異物に張りつき、前戯も潤滑油もない挿入によって、異物が棘だらけの木杭に思えた。

「ひう、痛っ……もう、やめ、」

「おいおい、勘弁してくれ。挿れただけだろ」

冷たい声が聞こえると共に、異物がずるりと引き抜かれる。完全に抜けてしまう直前——ずしり、と重たい衝撃が秘奥を叩いた。遮ろうとする内壁は押しのけられ、擦れた痛みに唇を噛む。ごめんなさいと浮かぶ叫びは声にすることもできなかった。

そして何度も。快樂とは程遠い苦痛を送りこむ。腰が打ちつけられるたびに、噛んだ唇の隙間から息が漏れた。

「ふ……あ……っ、」

「ちょっと！ オレも待っているんだから、早くしてよ」

「わかってる」

いつの間にか、聖の頭部は解放されていた。すっかり空いた口に再び、トラが自身を押しつける。

「こっちも忘れないでね。ちゃんと舐めないと、あんたが辛いだけだよ」

「——っ！」

この肌に触れているのはリュウだけではないのだ。リュウと同じく、アルファの優位性を示し野蛮に猛る肉欲も、いずれ聖を貫くに違いない。その苦痛を減らすためならば、と恐る恐る舌を伸ばす。

「ああ……すごく上手。そう、しっかり濡らして」

舌全体を使って唾液をたっぷり絡ませれば、恍惚とした吐息が聞こえた。

上から下から、別々に動き、貫かれる。道具として一方的に扱われる行為は、ベータとのセックスになかった。身体を引き裂き、骨の髄まで奪い尽くされるような、乱暴なもの。

これが獣の、アルファのセックスであるならば。こんなもの知りたくなかった。

触れられてもいないのに自身がびくびくと跳ねる。苦痛の中で、聖の性欲が煮え滾っているの

だ。

触れて、ほしい。少しでもいいから、触れて。触って。

「あ、あっ、もう、だめ——」

後孔を犯す律動は速さを増し、堪えきれずか細い声をあげた。

聖の男性器からは限界を告げる透明な液体がじわじわと漏れ出ていた。突かれているだけで達してしまうなんて恥ずかしく、目を強く瞑って駆けあがろうとする熱を抑えこむ。

「やめ、てっ……あ、で、出ちゃう……っ！」

だが抵抗は無駄に終わった。今までよりも強く最奥を抉られた瞬間、放たれた熱い液体が放物線を描いた。マットに落ちていくそれは、禁欲の成果のように乳白色よりも黄色みがかってどろどろに濁っている。

「うわ、聖ちゃんって挿れられてイっちゃうんだ」

正面に位置するトラは、射精の様子をすべて見ていた。言葉にされてしまえば、恥ずかしさがこみあげ、顔を上げることもできなくなる。そして——

「ひゅっ!? も、もうやめ……! ぼ、ぼく……いっ、た、ばかりでっ！」

「関係ない」

聖が達しようがやまず、突かれ続ける秘奥。射精で疲れきった自身が反応し、再び血が集いだす。だが一度溢れてしまったばかりなのだ、まだ受け皿は完成していない。射精前よりも強い刺激に、悲鳴に似た声をあげてしまう。

「……っ。締めすぎだろ、お前、」

身体を貫くリュウの肉欲が膨らみ、切なげに呟く。

重たい体躯が聖の背にのし掛かる。聖の両肩を掴んで逃げ道を奪った後、抽送が激しさを増した。

「ほら……一番奥で、受け取れよ」

「んうっ———！」

壊れてしまうのではないかと思うほど、奥で。強く押しつけられた肉欲が弾けた。

相手の精を受けとめた時の独特の違和感。液体が腹に溜まった感覚に、ようやく事が終わったのだと息を吐く。

しかしまだ異物は、体内にしっかりと残っていた。

「……ああ、これで、丁度いいな」

リュウの言葉は冷たく、聖に絶望を与えた。

昇りつめたはずなのに存在感のある塊。達しようが力を失わず、ゆるゆると淫肉の中を蠢いている。放ったばかりの精液が潤滑油となり、より淫猥になった水音が響く。

「な、んで……もう終わり、じゃ、」

「一回で満足すると思うなよ。言っただろ、これがアルファのセックスだ」

終わりだと、言ってほしいのに。こんな荒々しいものを、何度もぶつけられては——絶句する聖の耳元に、リュウの囁きが落ちる。

「お前が壊れるまで、犯し続けてやる」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>